

3-14. 那賀町（徳島県那賀郡那賀町）

(1) アドバイザー派遣申請の背景

●地域の概要

那賀町は、平成 17 年 3 月 1 日、5 町村（鷺敷町・相生町・上那賀町・木沢村・木頭村）の合併により、誕生した。人口は 9,620 人、世帯数 4,088 世帯（2013 年 12 月末現在）。

徳島県の南部に位置し、東は阿南市、西は高知県、南は海部郡、北は勝浦郡、神山町、美馬市、三好市に隣接している。地域の北西部には四国山地、南部には海部山脈などを配しており、標高 1,000m 以上の山々に囲まれ、地域の 9 割以上が森林の中山間地域である。域内には那賀川及び坂州木頭川が流れ、両河川は旧上那賀町内で合流して地域のほぼ中央を西から東に貫流している。面積は 694.86km² あり、徳島県の総面積（4,145.10km²）の約 17% を占めている。

平均気温は 13.5℃（1993 年～2002 年の各年平均気温の平均）で、朝夕の寒暖の差が非常に大きいのが特徴である。また、平均降水量は 3,159mm（1993 年～2002 年の各年総降水量の平均）であり、徳島県内で最も降水量の多い地域となっている。



●アドバイザー派遣申請の背景・これまでの取り組み

町村合併前の、鷺敷町・相生町・上那賀町・木沢村・木頭村の丹生谷（にゅうだに）5 町村は、地理的・歴史的、また産業・文化面においても古くからの結びつきがあり、行政運営においても一部事務組合で丹生谷地域全体の課題やまちづくりに共に取り組んできた。一方、過疎化や少子高齢化が進み、さらには地方分権の推進や地方交付税の削減による財政困難等、多種多様な行政課題に対応するため、平成 17 年 3 月 1 日、5 町村の合併により「那賀町」が誕生した。合併当時 11,893 人いた人口も現在では約 9,600 人まで減少し、20 年後には人口が約半分になると試算されている。このままでは、限界集落が増え続け、山林や田畑は荒廃し、ふるさとの風景が消えてしまう。

町内の目立った観光名所は四国お遍路・第 21 番札所 太龍寺への参拝用「太龍寺ロープウェイ」（利用者年間約 10 万人）しか無く、しかも利用者は隣接する阿南市にある第 22 番札所平等寺に移動してしまう。今後は通過型観光から、那賀町の自然環境・歴史・文化等の地域資源を活用した滞在型・体験型観光へ変化させることが大きな地域課題になっている。

那賀町は良い意味でも悪い意味でも「山間部の田舎」であり、豊かな自然・棚田や山間地の農村風景、自然と向き合う生活文化が残っている。また、町内には古くから残る農村舞台も複数箇所に残存しており、人形浄瑠璃の公

演が行われるなど、歴史・文化面でも地域資源が数多く残されている。

今後、地域資源を活用して少しでも那賀町を訪れる人が増える仕組み作りに取り組みたいと考え、今回のエコツアーリズムアドバイザー派遣事業に応募した。

(2) アドバイザー派遣実施の概要

日 時	平成 26 年 1 月 27 日（月）～平成 26 年 1 月 29 日（水） 平成 26 年 3 月 18 日（火）～平成 26 年 3 月 19 日（水）
場 所	視察：那賀町内全域の観光施設、地域の様子等 1 回目研修会：相生地区 相生ふるさと交流館、木頭地区 コミュニティ・スペース「くるく」 2 回目研修会：鷺敷地区 那賀町地域交流センター
アドバイザー	株式会社南信州観光公社 代表取締役社長 高橋 充 氏 株式会社ジェイティービー旅行事業本部観光戦略部長、株式会社 JTB 総合研究所 客員研究員 加藤 誠 氏
参加者	<p>■1 回目</p> <ul style="list-style-type: none"> 相生地区 観光協会会長 1 名、観光協会会員の業者 4 名、観光協会事務局 1 名、農家 3 名、町会議員 1 名、酪農家 1 名、住民団体代表者 3 名、住民 5 名、行政関係者 3 名 計 21 名 木頭地区 行政関係者 3 名、観光協会会員の業者 4 名、住民団体代表者 1 名、地域住民 2 名、計 10 名 <p>■2 回目</p> <ul style="list-style-type: none"> 観光協会会長 1 名、観光協会会員の業者 4 名、観光協会事務局 1 名、農家 3 名、町会議員 1 名、林業グループ代表 1 名、住民団体代表者 4 名、地域住民 2 名、行政関係者 6 名 計 23 名
スケジュール・方法	<p>■1 回目</p> <p>【1 日目】</p> <ul style="list-style-type: none"> 那賀町内の視察 那賀町内でエコツアーリズム・グリーンツアーリズムの導入を検討している那賀町・相生地区を中心に視察して、今後のエコツアーリズム導入に活かせる地域資源や自然環境等について、エコツアーリズム・グリーンツアーリズムの導入の可能性についてアドバイスをいただいた。 打ち合わせ <p>【2 日目】</p> <ul style="list-style-type: none"> 那賀町木頭地区の視察 那賀町木頭地区では、地域住民が山村留学センターや移住体験事業を運営、炭窯の再生プロジェクト、古民家を改修したコミュニティカフェの運営、といった様々な住民活動が盛んであり、それらを視察していただき、今後、エコツアーリズムに発展させる為には何が必要なのか？についてアドバイスをいただいた。 那賀町・木頭地区にて「エコツアーリズム研修会」 地域住民の方を中心に参加していただき、飯田市で行われているエコツアーリズム・グリーンツアーリズムの実例紹介、今後、木頭地区でエコツアーリズム・グリーンツアーリズムを進めるために必要なこと・もの、について、研修をしていただいた。 <p>※研修会終了後、郷土料理「かきまぜ」「そば米汁」で昼食会を開催</p> <ul style="list-style-type: none"> 那賀町・相生地区にて「エコツアーリズム研修会」 行政関係者・観光協会・会員、地域住民の方を中心に参加していただき、飯田市で行われているエコツアーリズム・グリーンツアーリズムの実例紹介、今後、相生地区でエコツアーリズム・グリーンツアーリズムを進めるために必要なこと・もの、について、研修をしていただいた。 <p>【3 日目】</p> <ul style="list-style-type: none"> 那賀町役場・エコツアーリズム導入担当者にアドバイス

■2回目

【1日目】

- ・那賀町内の視察
那賀町内の道の駅、宿泊施設、野外活動センター、町立病院など
- ・打ち合わせ
- ※宿泊先・四季美谷温泉の中田料理長とジビエ料理に関する意見交換

【2日目】

- ・那賀町・驚敷地区にて「エコツーリズム研修会①」
「観光地域づくりとエコツーリズム」をテーマに、エコツーリズムによる観光まちづくりとは、観光まちづくりの進め方、地域資源を活用した観光商品の作り方・売り方、について研修を実施。
- ・那賀町地域交流センターにて「エコツーリズム研修会②」
「観光地域づくりとエコツーリズム」をテーマに、地域資源を活用した観光商品の作り方・売り方、プロモーションの方法、エコツーリズム推進のポイント、について研修・意見交換を実施。

(3) アドバイスの内容

<第1回>

●町内視察

- ・関西都市圏からバスで4時間かかるという那賀町の立地は、旅行として考えた場合では悪い立地ではない。
- ・木頭地区に伝わる古代布「太布織」のワークショップ等の伝統文化は、もっと観光資源として活用できる。
- ・町内を視察しただけでも、多くの体験プログラムを準備・企画できるので、実際に1つでも多くの体験プログラムをつくることから始めた方が良い。

●研修会

- ・本物の体験を実現することで、そこに感動が生まれる。地域の人がインストラクター受入農家として関わり、普段行っていることをそのまま、訪れた学生に体験させることが大切。
- ・南信州観光公社で実際に行っている、体験型観光の手法を用いたツアー向きプログラム「小京都飯田歴史散策と和菓子探訪の旅」「桜守の旅」を紹介していただき、那賀町でも工夫をすれば様々なプログラムを実施できるとアドバイスいただいた。

<第2回>

●町内視察

- ・那賀町内には様々な観光施設・資源が点在しているので、それらを結ぶ工夫が必要である。(拠点づくり、看板の整備、交通手段など)
- ・観光資源・地域資源として良いものが多くあるので、地域住民がそれらについて自信をもつことが重要。
- ・四季美谷温泉のジビエ(鹿肉)料理はもっと広めた方が良い。

●研修会

- ・旅行のスタイルが「団体」から「個人」に変化しており、対象地も「観光地」から「生活地」を求めるようになっている。

- ・地域における観光まちづくりのキーワードは「住んでよし 訪れてよしの地域づくり」である。
- ・エコツーリズムは、新たな需要の創造と環境保全を両立させ、持続可能な観光まちづくりを進めるための重要な概念である。
- ・日本版エコツーリズムでは、これまでの自然保護や環境保全を中心とした動きから、日本古来の伝統的な生活文化や食文化など地域に密着した生活者のライフスタイルのなかでの普及啓発へ領域が広がっている。
- ・これからの旅行では、「五感に訴えるシナリオづくり」が必要。どこでもできる体験ではなく、そこにしかないもの、そこでしか体験できないものが求められる。
- ・今後、まずやらないといけないことは、今回集まったメンバーが中心となって、エコツーリズムに取り組む組織をつくること。



(4) アドバイザー派遣実施の効果

●参加者や関係者に与えた効果

那賀町の地域住民のなかでは、もともと「観光」ということにあまり関心もたれていなかったため、今回のアドバイザー派遣事業により、自分達が住む地域の魅力や地域資源について再発見をすることができた。また、それらをうまく活用できれば観光として成功するのでは？という確信を持つことができた。

●今後の期待される効果

今回のアドバイザー派遣事業がきっかけとなり、町内の観光振興や地域振興に興味があり具体的に何かをしたい、という方々に集まっていただけた。今後は、勉強会の様なグループを発足させることになったため、さらに具体的に活動を推進していく団体に発展することが期待される。

●今後の取り組み

今回のアドバイザー派遣事業がきっかけとなり集まった方々で勉強会の様なグループを結成、町内の地域資源を活用した体験プログラムを整理・企画して、実際に商品化できるように取り組む。

(5) アドバイザー派遣を実施して（地域からの声）

●参考となった事項

那賀町は徳島県内でも不便といわれている山間地に位置しており、地域住民は「こんな不便な山のなかに、わざわざ観光に人が来るはずがない」と考えることが多かったが、今回、アドバイザーの方より、関西都市圏から4時間という立地条件は、宿泊を伴う旅行先としてはちょうど良い、地域に残っている様々な本物の地域資源を体験してもらうことに意義がある、というアドバイスをいただき、この地域には自分達が気づいていなかったポテンシャルがあることを知ることができ、今後の取組みに対する意欲が高まった。

●その他感想

今後、アドバイザー派遣事業がきっかけとなり集まった有志グループで、町内の様々な地域資源・観光資源・伝統文化等を活かした体験プログラムを整理・企画して、具体的な取組みへと展開していく。

(6) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

株式会社南信州観光公社 代表取締役社長 高橋 充 氏

●地域におけるエコツーリズム推進の取組の現状と課題

素材は多くあり、意のある人もいるが、それぞれに全体の連携面において難ありと感じている雰囲気があるので、役場主体で窓口を作り事業推進を図る必要がある。

●特に魅力を感じた地域の自然観光資源

- ・木頭地区蟬谷集落の巨石～清水～杉巨木トレッキングルート
- ・木沢地区剣山スーパー林道を活用したトレッキング、樹氷
- ・太龍寺お遍路道(古道)
- ・那賀川流域の地形地質

その他にも多くの魅力のある資源がありますが、自然的を絞って厳選した。

●アドバイス（講義等）の概要

南信州での取り組みについて紹介をした後で、主に下記の点について質疑応答も含めて助言をした。

- ・京阪神地区からバスで3.5～4時間というアクセスは、こと教育旅行においてはちょうど良い時間的な距離であるため、旅行会社に対してきちんと分野別に体験できるプログラムを整理し、受付窓口を観光協会に据えて、教育効果の高いプログラムと安心して利用できる受入システムを表現したパンフレットを那賀町として作成して営業を行えば十分に集客できる。
- ・民泊は教育旅行市場では大きな要素の一つとなっている。各地区20軒、那賀町全体で80軒程度の民泊農家があれば、平均サイズ4クラス160名(40班)の学校の受入も余裕を持って受入可能になる。南信州では端から端まで1.5～2時間の範囲で1校の学校の民泊を受けることもあるが、緊急時も含めてきちんとしたコーディネート体制を取ることができれば広域分散型でも問題無い。
- ・15年程前にグリーンツーリズムを行なった地区では、もてなし過ぎによる疲労感ばかりが残ったとの話があり、あくまでも初めて会う人の普段の生活や生産の現場に受け入れてもらい、作業や生活を共に過ごすことで良い交流が生まれるというコンセプトを明確にして、利用者受入先双方が同じ目標に向かうことでそうしたことは軽減される。

●全体構想への取組状況・意向について

全体構想への取組については、特にそれを意識した動きはまだなされていなく、町としてエコツーリズムの推進を目標として掲げ、その窓口の選定を行なうところから始めなければならない段階である。ただ、自然観光資源は豊富で、積極的な地域住民もいるため、そこがクリアされれば大いに期待できる。

●地域に対する印象、今後地域に期待すること（メッセージ）

教育旅行はもちろん、一般団体においてもテーマ旅行には十分に魅力のある素材があるので、町公式の受入窓口を選定し地域への浸透を図りながら事業推進を図ってもらいたい。参考までに、下記に今回の訪問を通じてプログラム化可能と思われる素材を分野別に列挙する。

①スポーツ・アウトドアプログラム

1. 乗馬(外乗付) 2. ラフティング 3. カヌー 4. 溪流釣り 5. デイキャンプ 6. キャンプ
7. 杉一本乗り 8. 川遊び 9. お遍路道登山

②農林業プログラム

10. 田植 11. 花作業 12. 柚 13. 茶摘みとお茶作り 14. 森林営林 15. 野菜植付
16. 野菜収穫 17. 稲刈 18. 農家民泊

③伝統工芸・芸能プログラム(見るではなく、作る・演じる)

19. 紙漉(日帰り) 20. 紙漉(1泊2日) 21. 太布織(古代織) 22. 太布糸作り 23. 草木染め
24. とんぼ玉作り 25. 人形浄瑠璃体験(農村舞台) 26. お遍路講座

④味覚(作られたものを食べるではなく、作って食べる)

27. はんごろし(おはぎ)作り 28. 柚ジャム作り 29. 柚料理作り 30. 柚味噌作り
31. コンニャク作り 32. ジビエ料理(鹿肉)作り

⑤語り部(人に学ぶ)

33. 太龍寺住職法話 34・35. Uターンの若手経営者の語り(わじき温泉・そわか)
36. プロが認めたアマチュアカメラマンの生き様を知る(KEN 'Sカフェにて)
37. 林業家の魂に触れる 38. 県花ジンリョウユリの守人のこだわりに触れる

⑥ガイドツアー

39. 水崎新四国八十八ヶ所廻り 40. 蟬谷清水と巨石巨木トレッキング 41. 剣山樹氷ツアー
42. 剣山ネイチャートレッキング 43. 滝めぐり 44. わじき縁日七福神巡り
45. 那賀川地質ウォーク

⑦産業観光(工場・施設見学や、山間部の地域活動を知る)

46. 大塚製薬ワジキ工場 47. 長安ロダム 48. 榎きとうむら

⑧その他

49. 相生森林美術館と版画教室 50. おららの炭小屋の取り組みと炭加工体験 51. 吹筒煙火を知る
52. 太龍寺ロープウェイ

株式会社ジェイティービー旅行事業本部観光戦略部長、株式会社 JTB 総合研究所 客員研究員 加藤 誠 氏

●地域におけるエコツーリズム推進の取組の現状と課題

【背景】

那賀町は平成 17 年に 5 町村（鷺敷町・相生町・上那賀町・木沢村・木頭村の丹生谷）合併により誕生した。主に林業で栄えた町村で、昭和 30 年代に約 3 万人弱いた人口も現在では 9,600 名と約三分の一になり、2040 年には 4,000 名まで減少するといわれており、過疎化が進んでいる町だ。

【現状と課題】

旧 5 町村の産業は様々で、米、ゆず、いちご、花き、林業などが生産・加工されている。歴史的に町全体が 1、2 次産業を生業としてきたため、観光での地域活性化及び地域振興について議論されたことがほぼ無い。那賀町は山間部の田舎町で豊かな自然や棚田や山間地での農村風景、自然と向き合う生活文化が残っている。旧 5 町村には様々な豊かな自然観光資源、アクティビティ、歴史的建造物、近代インフラ建造物があるものの、情報、仕組み等の一元化や共有がされていないことが最大の課題である。また、自然観光素材へのアクセス（インフラ）が整備されていないため、訪れる観光客のマーケットが限定的である。

那賀町観光協会が機能していないことを踏まえ、観光協会が観光における推進母体（プラットフォーム機能）として観光推進の中心的存在になることが重要で、官民一体となった推進が必要である。

●特に魅力を感じた地域の自然観光資源

【太龍寺ロープウェイ】

- ・ 21 番札所へ行くためのロープウェイ
- ・ 建物、駐車場、食事、土産スペース等が充実しており、ハブ施設としてふさわしい

【那賀川】

- ・ 流れの緩急が豊かでラフティング、カヌー等のリバーツーリズムに期待ができ、アクティビティの場としては申し分ない

【トレッキング&乗馬】

- ・ 四季美温泉：「花と山と温泉」ツアー（トレッキング）を実施している
- ・ 観光乗馬コルツ：乗馬施設としては珍しく、場外トレッキングが出来る

【歴史・文化】

- ・ 農村舞台：人形浄瑠璃の上演

【大麿の滝】

- ・ 演出や加工が必要だが、トレッキング道等があり素材としてはすばらしい

【白人神社】

- ・ パワースポットとして面白い

●アドバイス（講義等）の概要

4 つのテーマに沿ってアドバイスをを行った。

1) エコツーリズムによる観光まちづくり

旅のスタイルは年々変化し団体旅行隆盛の時代から個人需要へとシフトして来た。つまり観光地ではなく個々に合った「生活地」を求め始めた。住んでよし、訪れて良しのオンリーワン地域を目指すことが必要である。観光街づくりの原点は「地域社会」「地域環境」「地域経済」が偏り無く三位一体で進めて行くことが地域全体を活性化する。三位一体のどこかが欠損すると地域では環境への悪影響も出てくる。そのためにも、消費旅行から環境や地域

に配慮した環境共生型観光への変革が必要である。

持続可能な観光街づくりはエコツーリズム主体者（行政・専門家・観光客・旅行会社）が「環境保全」「資源を生かした観光」「地域振興」を常に意識してはならない。

つまり、日本版のエコツーリズムにおける観光街づくりにおいて、日本古来の伝統的な生活文化や食文化等、地域に密着した生活者のライフスタイルの中で普及啓発を進めなければいけない。

2) 観光街づくりの進め方（実践）

地域観光マーケティング推進のステップは下記の通りである。

- ①地域の推進体制の構築
- ②役割分担の明確化
- ③地域観光資源の分析と活用法の整理
- ④マーケットの把握と対象マーケットの明確化
- ⑤効果的な商品化・マーケティング活動の実践

地域観光マーケティングには問題点もある。観光関連産業だけではなく、他産業関係者や、地域住民の統一的な推進体制が必要だが、仕組みや組織はあるものの成果が出ないことや、「まち」が一枚岩になっておらず推進リーダーが存在しない等、理想と現実のギャップがある。民間主導で「本気で動ける組織」への意識・体質の改善が急務である。

地域の「観光街づくり」体制のポイントは下記の通りである。

- ①観光振興へ向けた機運が高まっているか
- ②地域のビジョン・目的が明確か
- ③多様な主体と連携しているか
- ④熱意の溢れたリーダーがいるか
- ⑤継続的・持続的な事業展開が可能か
- ⑥中期の事業計画に耐えうる予算が確保されているか

また、役割分担の明確化もしなければいけない。

地域、観光関連組織・団体、市町村、都道府県、国などのステークホルダーがいる中で、観光を通じた地域活性化に向けて地域の事情に基づいて誰が何をやるのか明確な役割分担をして行くことが重要だ。

本来の地域の魅力を再認識することや、観光客目線での評価、住民視点での見直し等、地域を客観的に見直す事も重要である。マーケティングも重要で、狙うべきターゲットを正しく設定し、強みを伸ばすための取り組みや、効果的なプロモーションの実施をする事を心がけ、心理的変数での設定、地元をターゲットとすることがポイントである。つまり、地域の生活文化を感じさせ、マーケットニーズに適用し、来訪者目線で効果的なマーケティングの実行が重要である。

3) 商品戦略

現在の旅行形態は「モノ消費」から「経験消費」へと変わりつつある。つまり主観的な消費行動から生み出される楽しさ、感動、審美性などが重視される消費の形態だ。

経験経済の考え方では娯楽経験、審美経験、教育経験、脱日常経験などは新たな価値観を形成出来る。この4つの経験こそエコツーリズムで提供できる新たなツーリズム形態である。

地域で得られる本物の情報や限られた情報を与えることにより品質や価格などのスペックではなく、「五感に訴える物語」として旅を創造することが出来るようになる。

商品開発のポイントとして3つある。

- ①希少性（この旅行でしか体感できない）
- ②季節性（今しか見ることが出来ない）

③地域性（文化・食・その土地ならではの）

つまり、どこでも出来る体験ではなく、そこにしかないもの、そこでしか体験できないものが求められている。新たな旅への関心としての事例として、「山ガール」「アニメ聖地巡礼」「歴女」など従来の形態とは異なるまったく新しい旅のニーズが生まれているのが典型的な事例だ。

4) チャネル戦略

地域観光商品販売に向けては2つのステップが考えられる。

- ①地域型観光を推進するプラットフォーム組織による情報の一元管理
- ②旅行会社、運輸事業者と連携した顧客獲得戦略

地域統一的な推進体制と本気で動ける意識の高い組織が必要であることから、プラットフォーム組織の構築が何よりも重要である。プラットフォームとは、地域コーディネーター機能である。先にも述べたように主体として、行政、経済団体、各種組合、民間組織、宿泊施設といった多様な業種業態の企業団体が参加した観光街づくり集団のことである。

観光商品の流通経路も視野に入れておかなければならない。

地域独力で販売するにも限界がある。そこで旅行会社のシステム・ノウハウ、輸送業者の活用が有効である。地域の役割×旅行会社の役割×輸送業者の役割を掛け合わせ、三位一体の協業体制の構築が必要なのである。

5) プロモーション戦略

いくら素晴らしい商品が出来たとしても来訪者が増え、地域活性化が図れなければ意味がない。いかに知ってもらいリピーターが増幅して行かなければさらに街は衰退して行く。そこで必要なのがプロモーションだ。

流通する情報は爆発的に増え、且つ情報が「伝わりにくい」世の中にあって「砂漠に看板」にならないために旅行行動ごとのメディアの使い分け、活用方法が重要である。

中でも、メディアへの露出をまずは考えなければいけない。プレスリリースやTV番組、新聞の活用が有効である。但し、言いたいことを発信するのではなく、言いたくさせる内容にすることが最も重要だ。またロコミ発生装置としてソーシャルメディアの活用も考えて行かなければいけない。

●全体構想への取組状況・意向について

那賀町からのレポートでは、全体構想認定について知らないと示されていた。

観光協会が存在するが、強力な推進者が不在である。個別のワーキンググループ単位での活動から始め、いくつかの実績を踏まえた上で行政・民間一体となって全体構想を作り上げて行く必要がある。

●地域に対する印象、今後地域に期待すること（メッセージ）

講義には那賀町の自然観光資源の多さと質の高さに自信をもたれている町の有力者の皆さんが参加された。しかしながら、いくら資源が多く質が高いからといって那賀町に多くの観光客が訪れ、消費し、町の地域活性化が促進できるわけではなく自己満足に終わってしまう。

下記に上げる事項を町全体の課題として議論していただきたい。

- ①誰にターゲットを置くか（家族旅行、修学旅行、団体旅行等）
- ②フェノロジーカレンダーの作成
- ③広報・PR戦略
- ④データの把握（観光資源/宿泊人員/入場（体験）人員等）を含めたマーケティング

2014年はお遍路開創1,200年だ。那賀町は遍路道であったこともあり、「お接待」文化が根付いている。現代風にいうと「おもてなし」といったところであろう。訪れた方に精一杯ご奉仕する精神がある。これは最高の強みだ。

自然観光資源の多さと質も大事だが最終的には「人」である。那賀町に行ってみたい、交流したい、住んでみたいと思わせることこそが地域交流や、エコツーリズムの原点である。

官民一体となった推進を期待したい。